

通時言語学と生成理論

三 上 司

かつて言語学の主たる考察対象は、言語変化であった。しかし Saussure (1916) 以来、言語の共時的な記述と分析にその関心に移り、現在の通時の研究では、言語の各時代の共時的な記述を比較することによって進められている。生成文法でもやはりこの影響を受けており、例えば、King (1969) は「言語変化の研究とは、時間の推移の中で言語の文法がいかに変化するのかを研究することである」と述べている。これに対して、Kiparsky (1968) は「言語変化は言語能力の形式を知るための窓である」と述べて、言語変化の注意深い分析によって、言語構造の諸相を明らかにすることが可能であると考えた。これは Saussure によってもたらされた共時言語学偏重の風潮を緩和することを意図したものと思われる。生成文法も、言語学の目標を共時的記述に置き、理想的な話者聴者と均質な言語社会を仮定する点では Saussure の理論に類似している。Saussure によると、言語変化は言語研究にとっては本質的なものではなく、個々の事件に過ぎないとされている。小論では生成文法が通時言語学研究に対してどのように取り組んでいるのかについて考えてみたい。

簡潔化と通時態

生成文法において文法とは共時的な言語の記述を指している。そして言語変化を文法の変化と考えるので、言語の通時的な研究では連続する二つの時代の文法を記述し、それらを比較することになる。その結果、文法は二種類の変化に従っていると主張されてきた。すなわち、新しい規則の文法への付加と文法の簡潔化である。規則の付加は、大まかに言って伝統的な音変化に対応している。文法の簡潔化は従来の類推の概念のさらに一般化されたものであり、規則の消失はもちろん規則の一部の消失、語彙エントリーの例外素性の消失などもこれにはいる。

類推変化の中には、文法の簡潔化に直接的に結び付けられないものも存在している。それは順序換えである。これは記号の数に変化がないので、簡潔性の尺度 (cf. Chomsky and Halle (1968)) が適用できない。そこで規則の順序付けに有標性規約 (marking convention) を導入し、有標的な順序付けは複雑化に対応させるという方法を取ったのである。

このような徹底した簡潔化への還元の試みにもかかわらず、文法の複雑化として分析しなければならない変化が数多く知られるようになった。Kiparsky (1978) はそれらを二つに分類している。すなわち、部分類推 (partial analogy) と誤り類推 (false analogy) である。部分類推とは、言語全体に起こった場合には簡潔化となるが、実際には変化が完了しないために、文法の複雑化を引き起こすことになる変化である。このタイプには規則の部分的な消失 (つまり、適用範囲の縮小)、規則の部分的な一般化 (ある下位環境にのみ

見られる部分的一般化), 規則の部分的順序換え(わずかな例にだけ新しい順序が導入される)などが含まれる。新しい規則, または新しい順序付けと併行して, 規則の古い形や古い順序が文法中に残っているのが特徴である。これらは規則素性や例外素性などによってレキシコンに記載されることになるので, 語彙的例外の出現であり, 文法の複雑化として分析されることになるのである。

文法の複雑化を引き起こすとされるこの部分類推を生成文法ではどのように処理するのであろうか。イディッシュ語の語末無声化規則の部分的消失を例にとりて, Kiparsky (1978)の主張を要約してみよう。イディッシュ語には語末の阻害音を無声化する規則が存在していた。この規則は次のステージで適用範囲が制限されて, 語末の子音連結 *-nd* のみ適用することになった。つまり規則の構造記述が複雑になったのであるから, 規則の部分的な消失である。その後, 語末シュワの脱落后にこの規則は完全に消失した。無声化規則が文法から直接消失したのであれば簡潔化の見本のような例であるが, そこに至る中間段階に見られる文法の複雑化の説明が困難なのである。この説明として, Kiparsky (1978) は現実の言語の変化の過程を次のように考えた。(a) 言語学習者は, 同じ言語にさらされた場合でも, 異なった文法を獲得することがある。その結果変異形が生じる。(b) 変異形の中には避けられる傾向にあるものと, 好まれる傾向にあるものがある。(c) 変異形のうち好まれる傾向にあるものは文法化される。この三つの段階を経た結果が複雑化を招いたというのである。異形は不完全な習得の結果であり, 異形の選択は言語使用の理論により決定されと考えられる。結局, 不完全な学習と変異形の選択の両方が一緒になってこの変化を決定したことになる。

従来は, パラダイムの統一性 (paradigm uniformity) などによって形式上の複雑化を説明しようとしてきたが, そのような原理は共時的な生成文法理論には現れない。これは派生の結果である出力同士の関係であり, 規則体系固有の特徴ではないのである。したがって, 不規則なパラダイムが変化を方向づけたのでは決してなく, 変化の結果に見られる共時的な特徴の一つがパラダイムの統一性なのである。

変化が部分的に終わる理由は, 新形が古い規範に道を譲るためである。これは言語使用の問題であり言語体系には無関係である。ここから部分類推は, 不完全な学習と話者の選択との相互作用により生じたものと考えられるのである。

文法の複雑化を招くもう一つの変化である誤り類推は, 伝統的に用いられて来たとおりの現象, つまり類推変化を指している。たとえばパラダイムの水平化 (leveling) などは代表的な例である。これも変化前と変化後の文法, すなわち規則体系を比較した場合に複雑化となる場合があり, 困難な問題としてその解決が保留されてきた。Kiparsky によると, これは言語習得中の話者にとって, 学習段階では最適であった文法が大人の文法にまで保持されたものと考えられている。

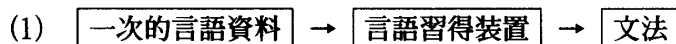
例えば, *honōrem*, *honōris* 等限られた言語資料のみを習得したラテン語学習者にとって, *honor* は主格単数形の最も直接的な形である。後に *honestus* を習得し, *flōs* ~ *flōris* のような例に対する母音間の *r*-化規則 (*s* → *r*) を習得しても, 学習者は結局文法の再編成を行わずに, 古い *honos* を廃語にしまうのである。これは言語発達の初期段階では, さらされている一次的言語資料の特定の集合に対して言語学習者は最適な分析を行っ

ているということである。生成理論では資料の完全な集合に基づいて文法が再編成されることを仮定しているが、現実の習得過程では誤りが再編成により正されず、そのまま保持することがあるのである。

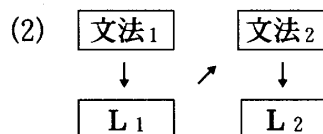
以上見てきたように、部分類推は不完全な学習に基づいた出力の一部が、言語社会の規範によって十分に受け入れられなかった場合であり、誤り類推は不完全な学習による文法が社会の規範に抵抗して大人の文法にまで保持された場合である。いずれの場合にも文法の形式ではなく、出力形式に関する問題である。このことから文法の形式そのものを言語変化に直接的に結びつけることはできないということになる。

言語習得モデル

上の Kiparsky の説明が正しいとすると、生成理論を通時言語学に適用する際には理論上重要な修正を必要とすることになる。すなわち、言語習得モデルである。生成文法では言語習得過程について、(1) に示すような仮説を立てていた。子供は言語習得装置 (language acquisition device) に基づいて、一次的言語資料と矛盾しない正しい文法を直接的に決定するという仮説である。



これは即時的言語習得 (instantaneous language acquisition) モデルとして知られているものである。獲得された文法は一次的言語資料中の不完全な文や誤りなどを除き、正しい文をすべて生成することが可能とされている。この仮説に基づくと、構築された文法は一次的言語資料中の正しい文だけを生成するのだから、言語は決して変化しないことになる。そこで、生成理論を歴史言語学に適用する際には、暗黙のうちに別の習得モデルが立てられている。それは概略 (2) に示すものである。



ある言語の一つの時期の文法は、それ以前の時期の同じ言語の文法の出力を一次的言語資料として構築されるのである。つまり、ある世代の文法₁によって生成された言語資料 L₁ にさらされた次世代の習得者は、文法₁ではなく文法₂を構築するのである。そして、文法₂は言語資料 L₁ではなく、L₂を生成することになる。(さらに詳しいモデルについては King (1969, pp. 84-85) を参照のこと)。

生成文法では音変化を文法に対する新しい規則の付加と考える。通時的には複雑化であるが、共時的には最適な文法でなければならない。前の時代の文法からは全く独立して、話者自身が一次的言語資料に基づいて構築しているからである。したがって、音変化は文法の複雑化であるという主張は、時間軸に沿った場合に適切なものであり、共時体系には適用できないことになる。

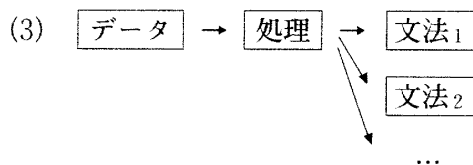
また、類推に対応する文法の簡潔化も、変化の前後の文法を比較して、変化後の文法は記号の数が少なくなっているということを意味している。しかし、すべてがこのタイプに収まるわけではなく、記号の数が多くなる例（規則の特殊化）や記号の数は変化せず、かつ有標な順序に変わる例（順序替え）などが存在している。Kiparsky (1971, 1972) では、これらの例を簡潔化の尺度とは別の評価尺度として、パラダイムの統一性や不透明性の原理を立てることによって説明しようとした。しかし、上で見たように、これらはどうしても形式上複雑になったとしなければならないのである。このような例は、音変化の場合と同じように、二つの違った時代の文法を比較すると、確かに複雑化しているが、言語学習者の現実の時間軸に沿った習得過程を考えると、その時点では最適な文法を習得しているということと、習得の途中で再構成ができない場合にはそのまま大人になるまで保持してしまうという説明が与えられることになる。

すると、歴史言語学では (2) で示した文法の構築過程の修正に加えて、さらに重要な理論上の修正が必要であることになる。すなわち、言語習得において、学習者がさらされる言語資料の範囲や習得順序が後の段階の文法に影響を与えるということである。共時的な理論で仮定されている最適な文法は、この観点からは、実際には実現されることのない理想上の体系ということになる。結局、生成文法の即時的習得理論と理想的な話者・聴者の仮説は通時的研究には用いることができないのである。また、文法の形式的理論は、それ自体では変化の方向を予測することはできない。これは話し言葉の社会的脈絡の研究と子供の言語獲得の研究が補足してくれる別個の問題ということになるのである。

可能な代案

生成文法の基本的な仮説である理想的な話者・聴者と即時的な言語習得モデルを歴史言語学に直接持ち込むことができないということになると、生成理論の枠組みを保ちながら言語の歴史的研究を進めるためにはどうすればよいのであろうか。以下では、現在提案されている三つの案について考えてみたい。

King (1976) では、このような壁を克服するために慎重ではあるが、斬新な説を提案している。すでに見たように、生成文法の根底にある文法構築の過程は、理想化されているために中間段階の要因がすべて無視されている。時間の経過や個人差を捨象しているために、変化する余地がないのである。そこで King は Kiparsky (1978) と同様、同一のデータが与えられても、話者は複数の違った文法に到達することがあり得ると提案する。すなわち文法の構築過程は下図で示す通りである。



実例として引用されているのはドイツ語からのものである。高地ドイツ語ではある時期に開音節のアクセントのある短母音が延長された。これは非常に一般的に観察され、大部

分の延長母音を説明している。

- (4) trage > trāge 'I carry' lade > lāde 'I load'
 hase > hāse 'hare' webe > wēbe 'I weave'
 name > nāme 'name' stele > stēle 'I steal'

しかしこの変化と同時に単音節名詞の閉音節母音も延長された。その環境は有声阻害音によって閉じられた音節である。但し、無声阻害音により閉じられた音節では延長されない (sack 'sack', mit 'with', lachte 'I laughed')。この変化は開音節の母音延長とは別の現象と考えられる。

- (5) stap > stāp 'staff' <stap/stabes/stabe>
 wec > wēc 'path' <wec/weges/wege>
 rat > rāt 'wheel' <rat/rades/rade>
 例外 : grop 'coarse' <grop/grobes/grobe>

(5) に示した例はいずれも基底に有声阻害音を持つが、母音延長の生起は不規則である。類推による説明では、まず開音節にある屈折形の母音が延長し、次に類推によって単音節の母音が延長したと考えることになる。パラダイムの規則化である。しかしこれでは *grop* がなぜ長くならなかったのかが不明ということになる。

不規則な母音延長は他にも観察される。開音節が *t* で始まる音節を後ろに従えている時、その母音は時として延長するが、延長しない場合もある。延長の有無を音声環境によって区別することはできない。

- (6) trete > trēte 'I step'
 bote > bōte 'courier'
 bete > bēte 'I pray'
 例外 : gate 'husband', site 'custom'

開音節は母音延長の最も一般的な環境であるのに、*t* を後ろに従えるときだけ例外的である。したがって、開音節の強勢母音が延長されるという説明だけでは完全な説明ではないことになる。そこで King は二つの規則 (7 a, b) を仮定している。つまり、延長には二つの一般化が競合していて、ある話者は規則 (7 a) を内在化し、別の話者は規則 (7 b) を内在化していると考えるのである。

- (7) a. V → [+long] / 開音節で
 b. V → [+long] / 有声阻害音の前で

常に延長が起きるのは規則 (7 a, b) の環境が重複する時、常に延長が生じないのは両

規則の環境がどちらも合致せず適用しない時。延長が揺れていて不規則なのは、両規則が衝突するときである。このように違う話者は同じデータから違う結論を引き出したと考えるとうまく説明できるというのである。ちなみに、その後の初期新高地ドイツ語では、重子音が単一子音に変化したため、開音節に多くの短母音が生じるようになり、規則(7a)を不透明にした。そのために(7a)は消失し、(7b)だけが小規則として標準ドイツ語に残っている。

この解決法にはまったく問題がないわけではない。同じデータからどんな種類の、そしていくつの一般化が得られるのかについて制約が存在しなければならないのである。上限がなければどんなことでも可能となり、理論は弱められて、つまらないものになってしまうからである。以上のことから、Kingは、この考えを安易に適用することは危険であると慎重な態度を取っている。

通時的研究のもう一つの有望な方法はLabov(1972)などで知られている社会言語学的な研究である。この分野では早くから変異形を研究対象としており、言語に常に観察される動揺、乱れを扱ってきている。この理論では変異規則(variable rule)によって変化の要因となる変異形の記述を行っている。但し、研究の性質上、長い期間にわたっての観察とデータ処理が必要であり、通時言語学に対して積極的な提案を行なうには理論的な枠組みの整備の点でまだ遅れていると言わなければならない。

さらに通時的研究の有望な方法としては、福井(2001)で触れられているものがある。これは言語変化の過程を、ある均衡が破れて新しい均衡に移行する過程として捉えようとするものである。新旧二つの均衡が併存し相互作用の結果一方が勝ち残る過程をゲーム理論として定式化しようというのである。詳細については不明であるが、ここでもやはり、言語変化の説明の中に併存する変異形を仮定していると思われる。

言語変化の研究では、共時的には許されない変異形の存在が不可欠と考えられる。可能な限り生成文法理論の枠組みを維持しながら、通時態の研究を行おうとする場合に、共時的言語学で仮定されている理想的な話者・聴者の仮説をそのままの形で受け入れることはできない。また、変異形の出現には言語習得過程が深くかかわっていて、即時的習得モデルも廃止されなければならない。現実には即した別の仮説の構築が必要であるように思われる。

参考文献

- Chomsky, N. and M. Halle (1968) *The Sound Pattern of English*. New York: Harper&Row.
 Dingwall, W. O. (ed.) (1978) *A Survey of Linguistic Science*. Second edn. Stamford, Connecticut: Graylock Publishers.
 福井直樹 (2001)『自然科学としての言語学—生成文法とは何か』東京：大修館
 King, Robert D. (1969) *Historical Linguistics and Generative Grammar*. Englewood Cliffs: Prentice-Hall.
 — (1976) *Competing generalizations and linguistic change*. Bloomington: Indiana University Linguistics Club.
 Kiparsky, Paul (1968) Linguistic universals and linguistic change. In Emmon Bach and Robert Harms (eds.), *Universals in Linguistic Theory*, 171-202. New York: Holt, Reinhart & Winston.
 — (1971) Historical linguistics. In Dingwall (ed.), 33-62.

- _____ (1972) *Explanation in phonology*. In Peters (ed.), 189-227.
- _____ (1978) *Analogical change as a problem for linguistic theory*. In Kiparsky (1982), 217-236.
- _____ (1982) *Explanation in Phonology*. Dordrecht: Foris.
- Labov, William (1972) *Sociolinguistic Patterns*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Peters, S. (ed.) (1972) *Goals of Linguistic Theory*. Englewood Cliffs, N. J.: Prentice-Hall.
- Saussure, F. de (1916, 1974) *Cours de Linguistique Générale*. Paris: Payot.

Diachronic Linguistics and Generative Theory

Satoshi Mikami

In 19th century, the scientific study of language was considered to be necessarily historical. After the Saussure's lectures (1916), general linguistics and historical linguistics came to diverge. It was proposed that they were two wholly separate fields, and that historical linguistics should be consigned to sociology or perhaps general history.

Today, developments in linguistic theory have powerfully influenced historical linguistics. But this influence has not developed historical linguistics in the directions that seem fruitful to us. There were some serious confusions between synchrony and diachrony. The difficulties turn out to be artifacts due to the simplifying idealization of the ideal speaker-hearer and instantaneous language acquisition, which are appropriate in the study of formal grammar but should not be incorporated into historical linguistics.

This paper is structured as follows. In the first section, we discuss that the generative view of linguistic change is not always well supported by the linguistic facts, and that the difficulties are due to the assumptions of the ideal speaker-hearer and of the instantaneous language acquisition. In the second section, we consider the assumption of instantaneous language acquisition and the alternative one that has property of allowing for the real time course of language acquisition to determine aspects of the system that eventually emerges. In the last section, we consider the three approaches that have a modest amount of reasonably solid evidence and that suggest solutions to some problems in historical linguistics.